



1. 2013年のCAA日本チョークアーティスト協会展に出品した作品。ホルベイン画材賞を受賞した
2. プロコースで初めて制作した作品
3. 教習市観光協会の依頼で制作したポストカード。教習赤レンガ倉庫以外にも、「とうろく流しと大花火大会」など、5種類のカードがある
4. アメーzingシリーズ「amazing TSURUGA」。石丸さんが考える教習の魅力めいっばい詰め込んでいる

**地域をPRする作品
アメーzingシリーズを制作**

2015年には、「CHALKART-DESIGN mamii」のインストラクター

特に猫が好きで、家族から「また猫の観察をした」とからかわれるほどだ。トラやオオカミなどの動物は、特徴をしっかりと調べてから制作に取り掛かる。そうした日頃の習慣が生きて、写真から実物の陰影を想像できるところになった。

「店の雰囲気合った看板をつくってほしい」という依頼があれば、実際に店を訪れ、オーナーとの会話の中でヒントを見つける。美容室ならハサミ、飲食店なら看板料理と、要素をはめ込めばいいだけではない。花と緑が好きで美容室店主に合わせ、ガーベラの外枠とモスグリーンの背景にメニューを記載しただけの時もおだやかな人柄が伝わると好評だった。

チョークアートは、オイルパステルで3〜5色に塗り分けた部分を、指でぼかしてグラデーションをつくる。どんな作品でも必ず指を使うため、制作者の力加減や体温で絵が変化する。「作家ごとの特徴が大きく表れるのがチョークアートの魅力です」と石丸さん。「チョークはすぐ消えてしまう」と避ける人もいますが、そんなことはありません」と続けた。

制作した作品には、退色を防ぎ、被膜をつくるために複数のスプレーをかける。コーティングされた絵は、手で撫でるくらいでは崩れず、長期間の保存も可能だ。



手前にあるワックスパステルは奥のオイルパステルより硬く、細かな部分や線を描くのに適している



最初に受注したのはベットの肖像画。見本にする写真は、輪郭の決定と色味の確認以外、あまり頼りにしない。「目で撮影するカメラと、自分の眼で実際に見るとでは、陰影が微妙に異なるのだという。」

「写真と同じように描いたら、チョークアートである意味がないので」と語る石丸さんは、普段からあらゆるものの観察を心掛けている。

「店の雰囲気合った看板をつくってほしい」という依頼があれば、実際に店を訪れ、オーナーとの会話の中でヒントを見つける。美容室ならハサミ、飲食店なら看板料理と、要素をはめ込めばいいだけではない。花と緑が好きで美容室店主に合わせ、ガーベラの外枠とモスグリーンの背景にメニューを記載しただけの時もおだやかな人柄が伝わると好評だった。

チョークアートは、オイルパステルで3〜5色に塗り分けた部分を、指でぼかしてグラデーションをつくる。どんな作品でも必ず指を使うため、制作者の力加減や体温で絵が変化する。「作家ごとの特徴が大きく表れるのがチョークアートの魅力です」と石丸さん。「チョークはすぐ消えてしまう」と避ける人もいますが、そんなことはありません」と続けた。

制作した作品には、退色を防ぎ、被膜をつくるために複数のスプレーをかける。コーティングされた絵は、手で撫でるくらいでは崩れず、長期間の保存も可能だ。

コースで教室開設のための資格も取得。自宅だけでなく、県内外でのイベントや、子ども会など団体の行事、店舗や大施設からの依頼でも体験講座を開いている。

今年11月29日から、教習市教育委員会生涯学習課の依頼を受けて「初めてのチョークアート教室」を生涯学習センターで実施する予定だ。

今後力を入れるのは、チョークアートを利用した地元の魅力発信。CAA日本チョークアーティスト協会の仲間と協力し、地元の名所や名物を描く「アメーzingシリーズ」を制作している。教習をテーマにした石丸さんの作品は福井しあわせ元気国体の会場でも展示され、全国への地元PRに貢献。実行委員会からの感謝状も贈られた。同作品は、11月22日から始まっている教習赤レンガ倉庫での展示会でも出品されている。

現在「アメーzingシリーズ」の制

作に参加しているのは中部地方を中心に4人。「来年にはアメーzingシリーズのグループ展を実施する予定なので、もっと仲間を集めていきたいです」と笑顔で語った。チョークアートの地元を掛け合わせ、それぞれの魅力を伝えるために活動する石丸さんから目が離せない。

石丸智恵さん

Art Board Creation SOPHIA設立後は、イラストレーションの仕事仲間からの依頼のみにとどめている。毎月のおすすめメニューなど、描き換えることを前提に水で消える画材で制作する看板ボードのインストラクター資格を今年取得し、来年度からの教室開催をめざしている



1色に見える部分でも、複数の色が組み合わされている。1度にいくつも制作するときは、自宅のいたるところがアトリエになる

光が当たっている部分と影になる部分、その中間で色を塗り分け、指で優しくなでるとグラデーションができあがる



「巻頭特集」

教習で活動するチョークアーティスト 石丸智恵さん

あたたかな作品で 地元の魅力を発信

オイルパステルと指を使って描くチョークアート。繊細な作品で地元・教習の活性化をめざすが、チョークアーティストの石丸智恵さんだ。依頼を受けて店舗の看板やメニューボードをつくるだけでなく、教習の魅力表現した作品の展示も行っている。

木板に描くアートに驚き スクールで制作法を学ぶ

住宅街の中にある一軒家。チョークアートの作品が並ぶ部屋の壁に、ひととき大きな作品が飾られていた。曙町にある気比神宮や毎年4月に実施される花換まつり、2012年にラムサール条約湿地に登録された中池見湿地など、教習の魅力が1枚の板に詰め込まれている。繊細であたたかなタッチは、オイルパステルを利用したチョークアートならではの。制作者は石丸智恵さん。スクールなどで教育・研修システムを構築してチョークアートの普及に努めるCAA日本チョークアーティスト協会の認定プロ作家・講師として活躍している。

創造社デザイン専門学校でイラストレーションを学んだ石丸さんは、教習市内の印刷会社で制作を手掛けるMacオペレーターとして働いた。退職後は別の企業で経理や経営について学びながら、副業でフリーランスの

2013年には、色彩の豊かさが評価されて、CAA日本チョークアーティスト協会展で協賛企業が選ぶホルベイン画材賞を受賞。翌年自宅で「Art Board Creation SOPHIA

イラストレーターとして活動してきた。チョークアートと出会ったのは2009年、旅行中のことだった。奈良県の旧市街地で実施されたイベントにたまたま立ち寄り、チョークアートのワークショップを目にした。体験講座を見学して、チョークアート制作の流れを知った。それまで色鉛筆やデジタルなど、さまざまな手法を学んできた石丸さん。「板に描いたことはなかったため、とても驚きました」と当時を振り返る。

京都府にある「CHALKART-DESIGN mamii」(チョークアートデザインマミィ)のレッスンでウェディングボードを作成。結婚後に生活が落ち着くと、同校のプロコースを受講した。